

赤ひげ診療譚

鶯ばか

山本周五郎

青空文庫

俗に「伊豆さま裏」と呼ばれるその一帯の土地は、松平伊豆守いずのかみの広い中屋敷と、寛永寺の塔頭たつちゆうに挟まれてはさま、ほぼ南北に長く延びていた。表通りには僅かばかりの商店と、花やあか桶おけを並べた寺茶屋があるほかは、商家のつましい隠宅とか、囲い者、かよい番頭などの、静かなしもたやが多く、だが、五筋ある路地へはいると、どの路地も左右の棟割り長屋が軒を接していて、馴れない者にはうっかり通ることができないほど、いつもうす暗く、狭く、そしてとびまわる子供たちでごたごたしていた。戸数は全部で四十七あるが、すっかり毀れて人の住めないところが十二戸もあり、そのほかにも借り手のない空き店だなが七戸か八戸あるので、実際の住人は二十七か八家族、合わせて百五十人から百七八十人を前後していた。

保本登が、去定の供でその長屋へいったのは、「鶯ばか」と呼ばれる男を診察したときのことであった。九月中旬の風の強い日で、五力所を回診したあとだから、もう日は昏くれかかつてい、路地の中は煮炊きの煙でいっぱいだった。むろん、去定はもう馴染なみのだろ

去定が笑つて云つた、「弥助、するとおまえは、風のやむまでそこにそうやっているつもりか」

「どうもしようがねえ」と屋根の上の男が云つた、「店賃が溜たまつてるし、この長屋を出るあてもねえんだから、まあ、わっちのことはしんぺえしねえでおくんさい、先生」

「呆あきれた野郎だ」と卯兵衛が云つた、「そんなことを云つて、屋根を踏み抜きでもすると承知しねえぞ」

屋根の上の男がなにか云い返したが、「うへえ」という言葉しか聞きとれなかつた。卯兵衛は舌打ちをし、まだ狭い路地の中でふざけている子供や、軒下で魚を焼いている女房などに小言を云いながら、去定たちを十兵衛の住居へ導いていった。

十兵衛は四十一歳、おみきという妻に、おとめという七歳の女の子があり、十兵衛は古くから小間物の行商をしていた。馬喰ばくろちよう町に森口屋といつて、足袋、股引ももひき、小間物などの卸屋がある。十兵衛はその店で勤めあげたが、二十一でお礼奉公の終るちよつとまえ、女に騙だまされてかなり多額な金を遣いこんでしまった。それで暖簾のれんを分けて貰うこともできず、十年ちかい奉公を水の泡あわにして、その店を逐おわれた。店の主人の情けで、繩付きにはならなかつたが、それから五六年のあいだは職を転々と変え、蕎麦屋そばやの出前持ちをしてい

るときに、おみきと知りあつて夫婦になつた。世帯を持つとなると肚もきまり、馬喰町の店へいつて事情を話した。森口屋の主人は承知をし、六十日限ぎりで品物を貸してくれることになつた。

それから約十五年、市中は云うまでもなく、朱引しゆびき外まで、品物を担いで根気よくしよばいして歩いた。十五年というとしつき、ただもう「根気」一つにしがみついて稼いだが、三人生れた子の上二人が、一人は五つ、一人は四つで死に、おみきの産後が悪かつたりというぐあい、いまだにこの長屋から出ることができなかつた。——ところがつい七日ばかりまえ、娘のおとめを伴れて銭湯へいったところ、そこで急におかしくなつてしまつた。おとめを裸にさせ、いっしょに流し場へはいつてゆくと、おとめが足を滑らせて転んだ。そのとたんに十兵衛は、脇で軀を洗つていた男を殴りつけた。男を殴りつけておいて、娘を抱き起こしながら、十兵衛はおちついた声でおとめに云つた。

——それみろ、おまえ転んだりするから、よそのおじさんが心配するじやないか、気をつけて歩きな。

そのようすがあんまりおかしいので、殴られた男は怒ることも忘れ、あつけにとられて眺めていたという。そして銭湯から帰ると、一尺四方ばかりの板きれを捜しだし、勝手か

ら目筈めぢるを持つて来て、部屋の隅の鴨居かもいのところへ板を渡し、その上へ目筈を伏せて、坐りこんだ。なんのことだかおみきにはわからない、どうしたんですかと訊くと、「しつ」と制止し、声をひそめて囁いた。

——静かにしな、千両うぐいすの鶯だ。

——鶯ですつて。

——とうとう手に入れた、ほら、鳴いてるだろう、あれが千両せえすの囀りだ。

十兵衛は鴨居の隅を見あげ、いかにも嬉しそうに、その「鶯の声」に聞き惚ほれながら、おみきに向かって囁いた。

——これでやつと貧乏もおさらばだ。

それから今日まで、十兵衛は稼かせぎにも出ず、寝るときと食事をする以外は、坐つたままじつと目筈を眺め続けている。ときには夜なかに起きあがって、心配そうに耳を傾け、すぐ安心したように独り頷いて、そのまま朝まで坐っている、などということもあつた。おみきが稼かせぎにいつてくれるように頼むと、彼はげんそうな顔をし、もうそんな必要はない、この鶯が売ればおれたちは一生安楽にくらせるんだ、と繰り返すばかりであつた。

以上のことは差配の卯兵衛から聞いたのであるが、十兵衛の住居へゆき、去定が診察し

てみると、どこにも疾患と思えるところがみつからなかった。去定に促されて登も診た。
登は竹造に提灯用の蠟燭を出させ、それに火をつけて十兵衛の眸子をしらべた。

「おまえさん方は私を気遣いだと思っているんですね」と十兵衛は憐れむような口ぶりで云った、「お気の毒だがそれは見当ちがいだ、私は生れてこのかたいちどもお医者 of 世話になつたことのない人間ですからね、こんなことをなすつてもまるつきりむだですよ」

そのとき戸外で「やあい泥棒」という子供たちの声がした。三人か四人で囃したてているらしい、「長次のぬすつと」とか、「長の野郎やつつけちまえ」などと叫び、がたがたとどぶ板を踏み鳴らす音が聞えた。

「またやってやがる」上り框にいた卯兵衛は舌打ちをして云った、「どうしてああ長ばかりいじめるんだか、しようのねえがきどもだ」

そして路地へと出ていった。

診察を終つた登は、去定に向かつてそつと頭を振つた。去定は鴨居のほうを見あげた。すつかり昏れてしまつたらしいし、行燈が煤けているため、家の中は陰気に暗かつた。貧しい家具に仏壇、ほかには大きな角張つた包み（商品であろう）が三つ積んであるだけの、がらんとした部屋の一隅の鴨居に、渡してある板と、その板の上に伏せてある目筈とが、

ぼんやりと見えていた。

「あそこに」と去定は十兵衛に訊いた、「あの目筈の中にはなにがいるんだ」

「しつ」と十兵衛は制止し、それから声をひそめて云った、「そんなばかな声を出しちゃう困りますよ、なにがいるかって、おまえさんには見えませんですか」

「おれにはなににも見えない」

「眼が悪いんだな、そうはみえないが」と云って、十兵衛は片手の指を立て、頭をかしながら去定に囁いた、「そらあれです、眼が悪くつても耳は聞えるでしょう、そら、あれを聞いて下さい、聞えるでしょう」

去定は黙っていた。

「千両の囀りですよ」と十兵衛は去定に囁いた、「もうすぐ買い手がつく筈です」

去定はまもなく立ちあがり、また来て診よう、とおみきに囁いてから、土間へおりた。

そこへ卯兵衛が戻つて来、いつしよに路地を出たが、外はもう夜の景色で、竹造は提灯に火をいれた。

「いま長次の泥棒と騒いでいたようだが」と通りへ出たところで、去定が訊いた、「いつか診た五郎吉のところの子供か」

「さようです」と卯兵衛が答えた、「どうもこの長屋に悪い女が来やあがって、いろいろよけいな口をきくもんですから、金棒かなぼうひ曳ひきの嬢かかあやがき共あがその尻馬しりまに乗りましてね、弱い者いじめばかりしてしようがありませんや」

「五郎吉のかみさんはあれから達者か」

「なにしろあのくらいですから、寝ているわけにもいかねえんだろうが、まあどうやらやつているようです」と卯兵衛は云った、「ときに、——十兵衛のようすはいかがでしょう」「なんとも云えないな」と云つて去定は、吹きつける砂すなほこり埃あから顔をそむけた、「ときどきこの保本をよこすが、もう少しようすをみてからでないとわからない、とにかくあれ以上ひどくなるような心配はないだろう」

そして去定たちは帰途についた。

二

養生所へ帰る途中、登が十兵衛の眼をしらべたのはなぜだと、去定が訊いた。登は長崎にいたとき、蘭医から教えられたのだ、と答えた。頭の中に腫物ができたりすると、似た

ような症状を起こす。そのときは眼に光を当ててみると、眸子ひとみに不規則な震顛しんせんが認められるという。それでしらべてみたのだが、十兵衛にはそれがなかった、と云った。

「では病気はなんだと思う」

「見当が付きません」と登は答えた、「軀にはまったく異状がありませんし、瘡毒などの痼疾こじつがあるとも認められませんし、ことによると無意識の仮病ではないかと思ひます」

「想像の診断は絶対にいけない」

「いいえ想像ではなく、くらしの条件からそう考えたのです」

十五年あまり稼かせぎとおして、いまだに生活が苦しい。二人の子を亡くしていることや、いつになつたら楽やすなくらしができるといふ当てもない。年も四十一になつてゐることなどで、「現在の生活からぬけ出よう」といふ、不断の願ねがひが重おもなつて来て、自分では意識せずずに頭の変調へんてうを起こした。千両の鶯う、などといふ妄もうそう想そうがそれをあらわしているように思おもう、と登は云つた。去定は黙もくつていたが、やがて、暇ひまがあつたら診しんにいつてやれ、とあつさり云つただけで、登の診断についてはなにも意見を述べなかつた。

それから五六日して、登がその長屋へいくつもりであると云うと、去定は例の金包みを渡して、これを卯兵衛に遣つかつてくれと云い、また、同じ長屋の井戸の脇わきに、五郎吉といふ

日傭取りひようとりがいて、みんな軀が弱いから、そこへも寄つて診てやるがいい、と付け加えた。——それから十月のはじめまでに五回、登は伊豆さま裏のその長屋へかよつた。十兵衛は長屋の人たちから「鶯うすばか」と呼ばれるようになり、相変らず坐つたきりで、鴨居の目簾を眺めくらししていた。

五郎吉の家族とも、このあいだに馴染になつたのであるが、二男の長次をべつにして、五郎吉も女房のおふみも、他の三人の子供たちも、引込み思案で弱気らしく、なかなか登ともうちとけなかつた。五郎吉はおふみより一つ年上の三十一、長男の虎吉が八歳、長女のおみよが六歳、二女のおいちが四歳、おみよまでが年子で、——長次は七歳だつた。——長次は初めてのときから登になつき、登の顔を見るととびついて来て、帰るまで側そばからはなれなかつた。二度目に訪ねたときのことだが、長次は銀杏ぎんなんの実を箆へらにいっぱい拾つて来たところで、登にそれを見せ、この次に来たら先生にあげるよ、となしいよで云つた。「そんなにどうしたんだ」

「伊豆さまの屋敷だよ」と長次は云つた、「伊豆さまの屋敷に大きな銀杏の樹があるだろう、風が吹くと、実が堀ほの外へ落ちるんだ」

「ずいぶんたくさんあるな」

「おれが一番さ」と云いながら、長次は勝手口の横の地面を掘って、その青臭い匂いのする実を埋めていった、「みんな拾いにいくけれど、おれにかなうやつはいやあしねえ、明日もまたいくんだ」それからまた力んで云った、「これいい値で売れるんだぜ」

登は戸惑ったような顔をし、ゆっくりと話をそらした。

「土に埋めてどうするんだ」

「こうやって六七日おくとね、上のこの臭い皮が腐って剥^むけちやうんだ、そうしたら中から実を出して洗って干すんだよ」

そのとき一人の女が通りかかって、露骨ないろ眼をつかいながら登に会釈した。年は二十八九だろう、肥えて肩幅が広く、胴がくびれておらず、広い肩幅がそのまま大きな腰へ続いている。頬骨の張り出た平べったい大きな顔には、いやらしいほど、厚化粧がしてあり、赤茶けた少ない髪で結^{まげ}った鬘も、安油でびたびた光っていた。

「保本先生って仰しやるんですってね」と女はどきつとするほど太い、しゃがれた声で話しかけた、「あたし向う長屋の端にいるおきぬという者ですが、このごろ頭痛が続いてどうしようもありませんの、おついでのとときいちど来て診て下さらないでしょうか」

登は黙って頷き、すぐに五郎吉の家へはいつてしまった。その帰りに差配へ寄ると、卯

兵衛の女房のおたつが、あの女はいけません、と首を振った。

「まったくとんでもねえあまです」と卯兵衛も側から云った、「こつ（千住の遊廓）で年期いっぱい勤めあげたという古狐で、知らねえもんだから店も貸したんですが、あいつのおかげで四月からこつち、長屋内にいざこざの絶えたことがねえ、まったく始末におえねえあまです」

「名はおきぬというそうだな」

「まったく」と卯兵衛が云った、「うわばみみてえな恰好をしてやがっておきぬもすさまじい、そのうちに刃物沙汰でも起こりやしねえかと、こつちはびくびくものですぜ」

おきぬの身边は複雑であつた。

彼女は千住で勤めているうち、深い馴染客が三人できた。その一人と夫婦約束をしたのであるが、年期があけても、その男にはまだ世帯を持つ力がない。そこで留吉という客をうまく騙し、彼の囲い者というかたちで、この長屋に家を持った。留吉は池之端七軒町で畳屋をやつており、年も五十二か三になるが、珍しいほど人の好いほうに、こんな長屋に困つておくということで、すっかり女に押えられている。しょうばいのほうもあまり景気はよくないようだが、女の我儘わがままには逆らえず、いろいろくめんしては金や物を運んで

いる。女はそれをもう一人の、夫婦約束をした男に貢ぐのだが、留吉は少しも感づいていないという。その片方の男は遊び人ふうで、年も女より五つ六つ若く、ちんと手漚てばなをかむところなどはなかなかあくぬけがしていた。おきぬはそれが大自慢で、「うちの人」などと相長屋の人たちにのろけているが、どこに住んでいるかも、職業も、名前さえも口にしたことがない、「うちの人」が来るのはたいいてい昼のうちだが、おきぬは彼を見るとたちまちうわのそらのようになって、酒肴しゅこうの支度に走りまわったあとは、あぶら照りの土用ちゅうでも雨戸を閉めてしまう。それでも静かにしているのならいいが、殆んど野放しといったあんばいで陽気にふるまう。やわになつてゐる根太が抜けるかと思うほど、どしんばたんとひどい音を立てたり、咆ほえたり、泣き喚いたりするので、たいいていあけすけなことに馴れている隣り近所の人たちも胆をぬかれ、わけのわからない子供などはしばしば、「おばさんが殺されるよ」と怯おびえた。おまけにそのあと、おきぬはさばさばしたような顔で、あたし、「うちの人」を怒らしちやつてひどいめにあわされちやつたわ、泣いたの聞えたかしら、などと云つてまわりのかみさん連中をくさらせるのであつた。

それだけではない、彼女はこの長屋の男たちにもちよつかいを出した。老若も好き嫌いの差別もなく、隙さえあれば誘いかけるし、使いにゆけば見知らぬ男をくわえて来る。そ

して、その弱味をごまかすためだろう、長屋じゆうを廻っては人の蔭口をきいた。それもおそろしく毒のある蔭口で、「あそこのおかみさんが誰それと寝ていた」とか、「どここの誰かは臭いめしを食ったことがある」などと云う類いで、その相手は長屋内でも特に貧しい家とか、気の弱い家族に限られており、「誰それは泥棒だ」と云う例がいちばん多かった。

「ここのところかかって、五郎吉一家のことを悪く云つてるようです」と卯兵衛が太息について云つた、「なにしろ男出入りだけでも、いまに一騒動ありやあしねえかと思つて気が気じゃあねえ、まったく弱つたもんです」

そんな女ならどうして追い出さないのか、と登が訊いた。すると女房は向うへ立つていき、卯兵衛はなんと云いようもない一種の身振りをした。

「そんななまやさしいあまじやありません」と卯兵衛は吐き出すように云つた、「それができるくらいならとづくにやつてますよ」

おきぬという女の、白うすのような頑丈な軀からだつきや、油で光る赤毛の小さな鬚や、まっ白に塗りたてた平べつたい、頬骨とがの尖つた顔や、露骨なながし眼を思いだして、登は背中がぞくぞくするのを感じた。

——そういう女はいるものだ。

あまりにあくの強い話を聞いて、殆んど憎悪におそわれながら、登は自分をなだめるようにそう思った。どこの長屋にも十兵衛と似たような、頭のおかしい者が一人や二人はいるものだし、またおきぬのように、ふしだらで恥知らずで、近所にもめごとを起すような女もいるものだ。

——当人の罪じゃない。

去定ならそう云うであろう、年月は知らないが、遊女などで年期を勤めあげるうちには、人の想像も及ばないようなことを経験するだろう。生れつきの性分によっては、豊かな境遇や勝手気ままな生活の中でも、おきぬに劣らずたちの悪い女がいる。おきぬ独りの罪ではない、貧困と無知と不自然な環境とが、ああ云う性分をつくりあげたのだ。そう云うであらう去定の言葉が、現実には聞えるように思い、登は力のない苦笑をうかべた。

十月下旬の或る日、登は去定の許しを得て、麴町三番町の父母を訪ねた。十日ほどまえ、母が足を病んで寝ている、という知らせがあった。母の八重は四十六であるが、三十前後から右足の痛風が持病になっていて、季候の変りめには痛みが起こり、半月、一と月と寝るようなことがよくあった。去年、長崎から帰るとすぐ、養生所へはいつてから約一年、

登は頑固に家へは帰らなかつたので、三番町を訪ねるのはかなり気が重かつた。しかし、いつまで頑張っているわけにもいかないし、天野との話もあるため、思いきつてでかけたのであつた。

家へ着いたのは午^{ひる}ころで、父の良庵は患家へにかけて留守、登の知らない書生が玄関にいた。母は寝ているというので、そのまま寝間へいつてみると、母親の枕許で、若い娘がなにか読んで聞かせていた。登はすぐに、それが天野のまさをだと気づいておどろいたが、まさをのほうでも思いがけなかつたのだろう、登の顔を見ると大きく眼をみはり、「あ」といいたげに口をあいたが、読んでいた合^{ごう}巻^{かん}本^{ほん}をそこへ置くなり、顔をまっ赤にして逃げだした。

三

登は一刻ちかくいただけで、父の戻るのを待たずに三番町の家から帰つた。

母はやはり持病の痛風であつたが、まえには右足の膝^{ひざ}がしただけだったのに、こんどは太^{ふともも}腿^{もも}から腰にかけて痛みがひろがり、立ち居も不自由になつた。それを聞いて、天野か

ら、身のまわりの面倒をみよう、まさをはがすんで来たのだ、ということであつた。――まさをはが養生所へ訪ねて来たとき、登はついに会わなかつたので、少女時代の記憶しかないが、姉のちぐさとは軀つきも顔だちも違つていた。痩せがたで小柄だが、いかにも健康そうであり、動作は若い牝鹿めしかのようにすばしく、ちよつとしやくれた、愛嬌あいぎょうのある顔には、清らかな溪流おもの面に見られるような、敏感で変化のある表情が、絶えずあらわれたり消えたりした。

――姉妹でもこんな違うことがあるんだな。

縹きりょう 縹きりょうもぬきんでているし、举措きよそもおつとりと優雅で、色や香りの濃厚な花を連想させるちぐさとは、あまりに違つているし、そのうえふしぎなことに、いまの登にはちぐさよりもまさをはのほうがはるかに好ましく、むしろ強くひきつけられたことに自分で驚いた。彼はそれが自分でも恥ずかしかつたようで、母がそれとなく縁組のことに触れたとき、もう少し経つてから返辞をします、とぶあいそに答えただけで、すぐにまた養生所の話に戻つた。

――あなたのようすでやつと安心しました。

母は別れるときに云つた。登の熱心な話しぶりで、彼が養生所へ入れられたのを、いま

ではもう怒っていないということがわかったらしい。さも安堵あんどしたといたげに、母は弱よわしく微笑しながら云った。

——留守にあんなことがあつて、あなたの気性が心配でしたし、ちようど新出先生からのお話が出たものだから、さぞ怒るだろうとは思つたけれどね。

——それはもう済んだことです。

養生所へ入つたことは、却かえつてよかつたと思つています、と登も笑いながら云った。それから、痛風には患部を温めるのもいいが、両便の通じ、特に排尿を規則正しくしなければならぬこと、また食事のとりかたなども注意して、登は別れを告げた。玄関まで送つて来たまさをに、彼は、「母を頼みます」と云い、まさをは、どうぞまたみまいに来てくれるようにと云つて、登の眼をじつと見あげた。

外へ出て、歩いていきながら、登は幸福な気分はなびらに包まれているのを感じた。玄関へ両手を突いてこちらを見あげたとき、まさをはその眼をぱちぱちと大きく二三度またたかせた。すると彼女の顔いちめんが、露をはらつたなにかの葩はなびらのように、みずみずしい精気を発するのを感じられた。

「あの眼だな」と歩きながら彼は呟いた、「よく気のまわる、賢さと敏感な気性が、あの

眼にそのままあらわれている」

ちぐさはどうだ。そう思つて彼はおそろしく決然と首を振つた。ちぐさの印象はすっかり色褪^あせたばかりでなく、いまの彼には些^{いささ}かのみれんも残らず、むしろ嫌悪を催すくらいであつた。

「これはおれが成長したことだろうか」と登はまた呟いた、「そうだ、養生所で経験したことが、たぶん幾らかでもおれを成長させたのだらう、そうだ、おれにとってはこのほうがよかつた」

各種各様な意味で、人間生活の表裏を見て来た。ことに不幸や貧困や病苦の面で、そこにあらわれる人間のはだかな姿を、現実に自分の眼で見えて来たのである。その経験から、ちぐさとまさをとの差を見分けるだけの、判断力を持つようになったのだ。

「だがまあ、そういきまくな」暫くして登は、去定の口まねで呟いた、「まさをを認めたいまのいま、にわかになんかそういきまくことはない、みつともないぞ」

彼は自分の顔が赤くなるように思い、そこで氣を立て直すために、残つた時間を有効に使おうと決心した。時刻はまだ午後二時ちよつとまえである。登は養生所へは帰らずに、そのまま「伊豆さま裏」へまわつた。

登はまず十兵衛のようすをみようと思つたのだが、差配の家の前をとおると、卯兵衛がとびだして来て呼びかけた。

「いま養生所へ使いをやろうとしていたところですよ」と卯兵衛はうろたえた声で云つた、「ひどいことになりました、すぐにいつてやって下さい、一家心中をやりましてね、孝庵さんがいちおう手当だけはしてくれましたが、ええ、いやそうじゃない、十兵衛じやありません。十兵衛はちゃんと驚をにらんでます、ええ、五郎吉のところですよ」

「なんでやつた、刃物か」

「毒です」路地へ駆け込みながら、まだうろたえた声で卯兵衛が云つた、「孝庵さんの話では鼠取りの毒だろうということですが、吐いた物も臭いし、家の中じゅうおっそろしく臭つてむせるようです」

四

五郎吉の家族は殺鼠剤をのんだのであつた。いわみ銀山しかじかの鼠取りといわれるもので、夫婦はどうやら助かるもようだが、末子のいち死に、登がいつてみたときは、

他の三児も重態であった。部屋の中は硫黄いおうと物の酸敗したような臭気が充満していて、うっかりするとこつちが嘔吐おうとしそうになった。

「ごめんね」長次は登を認めるとすぐに、ひどくしゃがれた声で、とぎれとぎれに云った、
「ごめんね、先生、かんにんしてくんなね」

「なにをあやまるんだ」登は笑ってみせながら云った、「なにも悪いことなんかしてないじゃないか」

長次は喉のどを詰つまらせて、「ぎんなん」とかすかに云った。よく声が出ないらしい、登は少年のほうへ耳を近づけた。銀杏の実をあげると約束したのに嘘をついてしまった、と長次は云った。彼は忘れたのではない、ちゃんと覚えていたのだが、かあちゃんが碾割ひきわり（麦）を買うのに足りなかったのです、ついみんな売ってしまったのだ、という意味のことを云った。

「よせよ、長」と登は首を振り、できるだけ乱暴に云った、「銀杏なんか好きじゃないし、おれはすっかり忘れていたくらいだ、そんなことを気に病むなんて男らしくないぞ」

「こんど取つたらあげるね」と長次は云った、「今年じゃなければ来年、げんまんだよ」
「よし、げんまんだ」

二人は右手の小指を絡ませて振った。長次の指が火のように熱く、けれども力のないのが登に感じられた。来年だぞ、と心の中で登は呼びかけた。そのためには生きなければならぬ、頑張るんだぞ長、こんなことで死んじゃあだめだぞ。——登は調剤すべき薬品の名を書き、使いに持たせて養生所へやった。使いの者にはわけを話して、今夜はこつちで泊るかもしれない、という伝言も頼んだ。午後四時ころに六歳のおみよが死に、日が昏れてから長男の虎吉が死んだ。死ぬとすぐに、他の者にはわからないように注意して、死したい骸を差配の家へ運んだ。残った子供は長次だけになったが、五郎吉や女房のおふみは、これらのことを知っているらしいのに、どちらもなにも云わなかった。養生所から届いた薬を、登は自分で調合し、煎せんじてのませた。長次はまったく受けつけなかったし、夫婦は黙って拒絶した。

「みんながこんなに心配してくれているのがわからないのか」登はしまいに本気でどなった、「こんな迷惑をかけたうえに、みんなの心配を無にするつもりか」

それでようやく、五郎吉もおふみも与えられた薬をのんだ。

日が昏れてからまもなく、野原孝庵という医者が見まいに来た。四十がらみの肥えた男で、そこにいる登には構わず、夫婦と長次をざつと診察し、渋い顔をしながら帰っていつ

た。まもなく差配の卯兵衛が、「晩めしをあがって下さい」と迎えに来た。登も空腹になつていたので、手伝いに來ている近所の女房たちにあとを頼み、卯兵衛といつしよに彼の家へいった。麦飯に、煮魚と味噌汁、香の物という食事であつた。卯兵衛もいつしよに喰べながら、その日の出来事を語つた。

朝の七時ころ、五郎吉は妻子を伴れて、「浅草寺へ参詣にいつて来る」と断わり、戸閉まりをして出ていった。べつに變つたようすはなかつた。そもそも家族そろつて浅草へいく、ということが常にないことなので、なにか變つたようすがあつたとしても、近所の人たちが気づかなかつたのは当然であろう。

「浅草へいくと云つたのは嘘で、すぐに戻つて来たんですな」と卯兵衛は云つた、「戻つて来たのも、うちへはいつたのも見た者はありません、両隣りの者も知らなかつたんです、そのじぶんは井戸端が賑やかで、うちにいる者は少ないもんですから、そのつもりになれば、人の眼につかずにうちへはいるのもそうむずかしいことじゃありません」

午すぎに、隣りのおけいという女房が、五郎吉の家でへんな呻き声や、子供の暴れるような物音を聞きつけ、それから大騒ぎになつたのであつた。

「しかしどうして」と登が箸を置きながら訊いた、「急にそんな、一家心中などをする気

になったのだろう」

「わかりませんな」と卯兵衛はあつさり答えた、「こういうくらしをしている人間は、死にたくなるような理由を山ほど背負ってますからな、まったくひどいもんです、ちよつとしたきつかけさえあれば、すぐにでも死にそうな人間が幾らもいますよ」

登は食事の礼を述べて、立とうとしてふと思いだした。

「あの孝庵という医者はこちらへ寄りなかつたらうか」

「寄りました」と卯兵衛は顔をしかめた、「薬礼は誰が払うかって、たしかめに来たんですが、病人のことはなんにも云わねえ、薬礼はこれこれ、いつ誰が払うかってね、急場でしょうがねえから頼んだんだが、——匙さじかげんはへたくそだが、銭勘定だけはうめえって、この辺では評判の医者なんです」

「そんなことはない、いい手当だった」と登は云った、「あれだけの処置を手早くやれるのは珍らしい、悪く云うのは間違いだよ」

登は外へ出た。空は曇つて、肌寒い風が吹いていた。長屋の多くは戸を閉め、もれてくる灯も疎まばらで、歩いていくどぶ板の鳴る音が、おどろくほど高く響いた。五郎吉の家の少し手前までいったとき、登はぞつとしながら立停った。——向うのほうから、まるで現実

のものとは思えないような、ひどくくぐもった、ぶきみな声が聞えて来たのである。それは陰気な響きをもって、地面の下のほうから、誰かに呼びかけているように聞えた。

「どうしました」とうしろで声がした。

登は殆んどとびあがりそうになった。それが卯兵衛だということはわかっていながら、とびあがりそうになり、全身が粟あわた立った。

「ああ、あれですか」卯兵衛は向うの声に気がついて、笑いながら云った、「貴方あなたがたは御存じないかもしれませんが、いってみましょう、長屋のかみさん連中ですよ」

卯兵衛が歩きだし、登もついていった。すると井戸端に、提灯を持った女たちが六、七人いて、二人ずつ代る代る、井戸の中へ向かって呼びかけるのであった。

「長坊やーい、長次さんやーい」

ひと言ひと言を長く引いて、ちようぼうやあーい、というふうに呼ぶのであるが、平常とは違うもの悲しげな、訴えるような哀調を帯びた声で、それが井戸の中にこもった反響を起こすため、眼の前に見えていてさえも、背筋が寒くなるようなぶきみさを感じた。

「長次を呼び返しているんです」と卯兵衛が囁ささやいた、「井戸は地面の底へ続いていますからね、死にかかっている者をああやって呼べば、こつちへ帰って来るっていうんですよ」

空には星一つ見えず、暗い路地に風が吹いている。風は強くはないが、たしかに冬の来たことを示すように、しみるほど冷たかった。登は井戸の中に響く女たちの嘆き訴えるような呼び声を、やや暫く黙って聞いていた。——使いの伝言で、来るかと思つた去定は来ず、登は十一時ごろまで五郎吉の家にいたが、ひと眠りするようにと云われ、差配の家へ戻つて寢床にはいった。枕が変わると寝にくいたちで、どうせ眠れはしないだろうと思つたが、まさその姿を想い描き、どういう機会に縁談を承知しようか、などと考えていると、幸福感で軀ぜんたいが温かく包まれるように思われ、いつかしらうとうと眠りこんでしまった。

午前三時に、登は呼び起こされた。

「面倒でしょうがちよつと起きて下さい」と卯兵衛が云つた、「長次のやつが先生に会いたいと云つてきかないそうです」

登は起き直つた、「容態でも変つたのか」

「わかりません、そいつは聞きませんが、ただせひとも先生に会わせてくれと云つて、承知しないんだそうです」

「なん刻どきごろだ」

「八ツ半です」と卯兵衛は寝衣の衿えりを搔かき合わせた、「弥平の女房がお迎えに来ています
が、いつて下さいますか」

「うん、着替えよう」登は立ちあがった。

待つていたのは、弥平という縁日あきんどの女房で。名はおけい、年は四十二、三にな
つていた。彼女は五郎吉一家と隣り同士であり、かれらの心中を発見したのもおけいで、
それ以来ずっと付きつきりで世話をしている。男まさりで向つ気が強く、幾人かの女房た
ちをてきぱきと指図しながら、子供たちの死躰の始末から、残っている五郎吉夫婦と長次
の面倒をみ、さらに湯茶のことまでぬかりなくやってのけていた。ただ登の閉口したのは、
彼女がおそろしくあけつ放しで、これまでかつて聞いたためしのないほど、乱暴な口をき
くことであつた。

——なんだいその腰つつきは。

五郎吉の寢床を片よせるとき、向うの端を持った女房の一人に、おけいは男のような声
でどなった。

——そんな腰つつきじゃあ××も満足にできやしめえ、もっとそのけつをあげな、けつ
を。

そのとき登は頬が赤らむのを感じたものである。だが、いま提灯で足もとを照らしながら、登を案内していくおけいは、人が変わったように温和おとなしく、しょんぼりとしていた。

「あの子は助かるでしょうかねえ、先生」とおけいは歩きながら訊いた、「長は助かるでしょうか」

「朝が越せば助かると思う」

「はあ」とおけいは深い溜息ためいきをついた、「ひとこと相談してくればよかったのに、おふみさんも水臭い、どうしてこんなことをする気になったんだろう」

五

おけいはふと立停つて、前掛で顔を押えながら、怨めしそうに登に訴えた。

「あたしとおふみさんは、きょうだい同様につきあつて来たんですよ、先生、こっちもその日ぐらしかから、力になるなんて口幅くちばしつたいことは云えやしない、けれどもこれまではどんな些細ささいなことでもうちあけあい、相談しあつて来たんです、本当に一皿の塩、一と匙さじの醤油も分けあつて来たのに」おけいは嗚咽おえつをかみころすために、ちよつと黙つた、「き

ようだいより仲良くやって来たのに、生き死にという大事なことがどうして云えなかったんでしよう、子供まで伴れて死ぬほどのわけがあったのなら、一言ぐらいこうだと云つてくれてもいいじゃありませんか」

登は黙つていた。彼はこういう人たちをよく見て来た。貧しい人たちはお互い同士が頼りである。幕府はもちろん、世間の富者もかれらのためにはなにもしてくれはしない。貧しい者には貧しい者、同じ長屋、隣り近所だけしか頼るものはない。しかしその反面には、やはり強い者と弱い者の差があるし、せんぼう羨望やしつと嫉妬や、虚飾やごうまん傲慢があつた。そのうえ、いつもぎりぎりの生活をしているため、それらは少しの抑制もなく、むきだしにあらわされるのが常であつた。——いつもは一と匙の塩を気樂に借りる仲でも、極めてつまらない理由、——たとえば、こつちへ向いて唾をしたとか、朝の挨拶が氣にいらなかつたとか、へんにつんとしていた、などというたぐいのことで、いっぺんにきゆうてき仇敵のように憎みだすのである。かれらがお互いに、自分を捨てても助け合おうとする情の篤あつさは、生活に不自由のない人たちには理解ができないであろう、と同時に、かれらの虚飾や傲慢や、自尊心や憎悪などの、素朴なほどむきだしなあらわしかたも、理解することはできないに相違ない。

——と匙の塩まで借りあい、きようだい以上につきあつていながら、死ななければならぬという理由は話せない。

貧窮しているための、相手に対する必要を越えた遠慮か、それとも頑迷な、理屈に合わない自尊心のためか、いずれにせよ、五郎吉夫婦には他人に話せない理由があつたのだろう。おけいが責めるのは当つていないし、当つていないということはおけい自身も察しているに違いない、と登は心の中で思った。

「ねえ先生」とおけいは歩きだしながら云つた、「お願いですから長坊だけは助けて下さい、死んじまつた三人はしようがないけれど、せめて長坊だけは助けてやって下さい」

「やってみよう」と登は答えた、「私にできる限りのことはするよ」

五郎吉の家には、おけいのほかに二人、近所の女房が寝ず番をしていた。長次は眼を大きくみひらき、口をあいて、短い急速な呼吸をしていた。仰向きに寝たまま、ときどき頭を左右に振り、そして力なく呻うめいた。

「長次——」枕許に坐つた登は、行燈を近よせるように頼んで、長次の顔を覗のぞいた、「私だよ、どうした」

「おれ、泥棒したんだよ、先生」と長次はぞつとするほどしやがれた声で云つた、「その

ことを先生に云いたかつたんだ」

「そんなことはあとでいいよ」

「だめだ、いま云わなくちや、いまだよ、だから先生に、来てもらつたんだ」まるでおとなの話すような調子であつた、「おれ、島屋さんの裏の垣根をね、先生、聞いてるかい」

「聞いてるよ、長次」

「島屋さんの裏の垣根をね、ひつpegがして、持つて来ちやつたんだ」と長次は云つた、

「おれが悪かつたんだ、おれ、そのほかにも泥棒したことがあるもの、だから、とうちやんとかあちやんが怒つて、もうだめだつて、おれのような、泥棒をする子が出ちやつて、近所で泥棒だつて云われちやえば、もうおしまいだつて、それでみんなで、死ぬことになつたんだ。水を飲まして」

登は女房たちを見た。おけいのどが湯呑を取ろうとし、登は「きれいな晒木綿さらしを」と云つた。毒物を吐くときに喉のどを爛ただれさせているし、もうごくりと飲む力はないと思つたのだ。おけいが手拭をきれいに洗い、その端に水を浸みこませて持つて来た。

登はその尖せん端たんを小さくまるめて、長次の口へ入れてやつた。

「吸つてごらん」と登は云つた、「舌でそつと吸うんだ、静かに、そう、静かに」

だが、長次は激しく嘔せ、僅かばかり吸った水といっしよに、悪臭のあるものを嘔吐し、脱力した軀をねじ曲げてもがいた。

「おれが悪いんだからね、先生」少しおちついてから、長次はまた云った、「とうちゃんや、かあちゃんのこと、勘弁だよ、ね、勘弁だよ先生、わかったね」

「わかった」登は長次の手を握った、「よくわかったから少し眠るんだ、話をすると苦しくなるばかりだぞ」

「水が飲みたい」と長次は云った、「でもだめだ、あとでだ、ね」

「すぐだ、すぐ飲めるようになるよ」

長次は眼をつむった。しかし^{まぶた}瞼は合わさらず、白眼が見えていた。鼻翼の脇に、紫色の斑点があらわれ、呼吸はさらに早く、小刻みになった。

「先生」とおけいがぎよつとしたように囁いた、「この息は死ぬときの息じゃありませんか、あたしこの息を知ってますよ先生、そうでしょ、死ぬときの息でしょ、どうにかして下さい先生、どうにかならぬんですか」

「そのまま死なしてやって下さいな」と向うからおふみが云った。

みんなとびあがりそうになって、振向いた。五郎吉もおふみも、これまで一と言も口を

きかず、寢床の中で横になったきり、殆んど身動きもしなかった。それがいま急に、人間の声とは思えないような、かさかさにしやがれた声で呼びかけたのである。振返ってみると、おふみはじつと仰向きに寝ており、眼はつむつたままであった。

「その子が泥棒したことは知ってました」とおふみはだるいような口ぶりで、ゆっくりと云った。「おきぬさんに云われなくつても、あたしはちゃんと知ってたんです、しようがなかつたもの、長が悪いんじゃない、どうにもしようがなかつたんだもの」

「おきぬだつて」とおけいがすり寄っていった、「あの女がなにか云つたのかい」

「あの子を死なしてやつて」とおふみは云つた、「そのままそつと死なしてやつて下さい、あの子のためにもそれがいちばんなのよ」

「おふみさん」おけいは覗きこみ、いきごんで訊いた、「おまえはつきり云つとくれ、あのすべたあまが長坊のことをなにか云つたのかい、え、あいつがなにか云つたのかい、おふみさん」

おふみは顔をしかめた、「うちの人が島屋さんに呼ばれたの、そうしたらおきぬさんが店にいて、長のすることを見ていたつて、証人になるつて云つたそうよ」

「あのいろきちがいがかい」

「いいのよ、悪いのはこつちだもの、おきぬさんに罪はないわ」

「ちくしろう」と云つておけいは身を起こし、ぎらぎらするような眼で宙をにらんだ、

「さかりのついた淫乱な雌めすいぬ犬ぬみたような、あのちくしろうあまが、そんなしやれたまねをしやがったのか」

「ごしうだよ、おけいさん」とおふみが哀願するように云つた、「迷惑をかけて済まないけれど、もうあたしたちのことはそつとしておいておくれ、長のやつもそのまま、死なしてやつておくれよ」

長次は明けがたに死んだ。

五郎吉もおふみも眠つていたようだ。女房たちは眼顔で語りあい、おけいが長次の死躰を抱いて、差配の家へ運んでいった。死んだきようだいの四人は、差配の家で湯灌ゆかんをし、みんなで死装束をしてやつてから、卯兵衛の隣りにある空店あきだなに移した。登はそれをあとで知つたのだが、長次が運ばれていったとき、彼は心の中でそつと云つた。

——これできようだいが揃そろつたな、さあ、いっしょに手をつないで、仲よくおいで。

上り端はなの煤けた障子が、うつすらと明るくなつた。気温がさがって、坐っている膝頭や足の指先に、ここごえそうな寒さを感じた。登は行燈の火を消し、火鉢に炭をついだ。

「先生、——」とおふみが云った、「あの子は苦しみましたか」

「いや」登は火鉢から手を引いた、「いや、苦しみはしなかった、らくに息をひきとつたよ」

「苦しみませんでしたか」

「死ぬときはもう苦しくはないそうだ」と登は云った、「頭が死ぬ毒でやられるから、見ている者には苦しそうだが、当人はもうなんにも感じてはいないということだ、長次は苦しそうなけぶりもみせなかつたよ」

おふみは良人のほうを見た。暫く見ていて、また仰向きになり、濟まないが水をもらいたい、と遠慮した口ぶりで云った。登は煎薬の土瓶どびんを取ったが、思い直して、冷たくなっている湯沸しから、空になつてゐる急須へ少し注ぎ、おふみに持つて行ってやった。

「気をつけて、少しずつ啜すするんだ」と登は注意を与えた、「急須の口からじかのほうがいい、用心しないと喉にしみるよ」

おふみは顔をするどく歪ゆがめたが、噎むせはしなかつた。五郎吉は軽い寢息をたて始めた。それは疲労し尽したというより、精神も肉躰も解放され、安楽にのびのびと眠りこんでいる人の寢息のようであつた。おふみは静かにそちらを見、長いこと良人の寢顔を見まもつ

ていた。

「こんなふうに寝ているのは初めてですよ」とおふみはしゃがれた囁き声で云った、「いっしょになつてから、そこそこ十年にもなるけれど、この人がこんなに、いい気持そうに寝ているのは初めてですよ」

六

「どうしてあたしたちを死なしてくれなかつたんでしょう」

暫くしておふみがそう云いだした。

「どうしてでしょう先生」とおふみは天てんじょう床を見まもつたまま云つた、「考えに考えたあげく、そうするよりしようがないから、親子いっしょに死のうとしたんです、そのほかにどうしようもなかつたのに、なぜみんな放つといてくれなかつたんでしょう」

「こんなふうに」と云つて、登はちよつとまをおいた、「こんなふうに死ぬのはよくない、持つて生れた寿命を、自分で捨てるなどということは罪だ、ことにこんな小さな子供まで道伴れみちづにするというのはね、——みんなが見殺しにできなかつたのは当然のことだよ」

おふみは口をつぐんだ。ずいぶん長いあいだ、身動きもせず黙っていたが、やがて、喉のかげんをして軽く咳^せき、独り言のように細い声で、ぼつりぼつりと話しだした。

五郎吉は深川、おふみは板橋で生れた。どちらも家が貧しく、五郎吉は七つ、おふみはもう五つのときから、子守に出された経験があつた。二人の親たちも同じような育ちかたで、五郎吉の父はぼて振^{ふり}の魚屋であり、おふみの父は屑屋^{くすや}や、人足や、手伝いなどを転々としていた。五郎吉は十二の年から薬種問屋に奉公にいつたが、十七のとき、倉で荷箱をおろしていると、それが崩れて来て、ひどく頭を打つた。当座はなんでもなかつたが、半年ほどすると、思いがけないときに一種の発作が起こるようになった。とつぜん意識が昏^{くら}んできて、ものごとの判断ができなくなる。薬の箱をしまいにいつて、棚の前に立つたとたんに、なにをしなければならぬか、なにをするためにそこへ来たのか、まったくわからなくなつてしまふ。荷を受取るために車を曳^ひいてでかけて、途中でその発作が起こり、車を曳いたまま二日も飲まず食わずで、市中を迷い歩いたこともあつた。

おふみは浅草並木町のめし屋に奉公していたとき、五郎吉と知りあつた。彼は薬種問屋から暇を出され、そのときは蔵前で荷揚げ人足をしていた。五郎吉が二十一、おふみが二十のときのことである。——知りあつてからまもなく、二人は江戸を出奔して水戸へいっ

た。おふみが岡場所へ売られることになったので、彼にその事情を話すと「いつしよに逃げよう」ということになったのだ。あたしが唆そそのかしたようなものです、とおふみは云った。「水戸に三年いて、そのあいだに虎吉と長次が生れたんですけれど」とおふみは続けた、「うちの人は気も弱いし、持病もあるし、知らない土地のことで、どうにもくらしがゆけなくなり、とうとうまた江戸へ帰つて来てしまいました」

ああ、とおふみは思いだしたように微笑した、「水戸を立退くまえに、親子でおおあらい大洗おおあらいさまへいきました、弁当を持つて半日、親子で暢のんびり海を見て来ましたが、あとにもさきにもあんなに気持の暢のんびりした、たのしいことはありませんでしたよ、生れてつから今日まで、ええ、あのときがたつたいちどでした」

江戸へ帰つてからもいいことはなかった。この三年ばかりこつち、五郎吉はあの発作こそ起こさないが、だんだん飽きつぽくなって来た。もともと眼はしのきくほうではないし、手に付いた職もないので、なにをやつても永續きがせず、あいだにおみや、おいちと口がふえたので、彼女がどんなに内職で補つても、着て喰べることさえ満足にはできなかつた。虎吉はぼんやりした子で役に立たず、女の子はまだ小さかった。その中で長次だけはよく気のまわる性分で、三つ四つのころから、ない知恵をしぼつて母親を庇かばおうとして来た。

「ほんの三つ四つのころからなんです、とても先生なんかにはおわかりにならないでしょう」とおふみは云った、「晩めしのとくに喰べる物がたりない、あたしはいつもみんなが済んでから喰べるようにしているんですけれど、喰べ物がたりないと思うときに限って、長次も喰べないんです、おなかがすかないとか、腹が痛いから、なんて云いましてね、気をつけてみると、少しでもあたしの口にはいるように、残しておこうとするんです」

「三つ四つの年ですよ」とおふみは繰り返し、「可愛い子だった」と、うつとりするよ
うに呟つぶやいた。

くらしはいつもぎりぎりいっぱい、五郎吉の稼げない日が三日も続くと、たちまち粥かゆも啜れなくなる。冬でも粉炭の量り買いだし、煮炊きの薪に困ることなどしよつちゆうだった。長次はそれを知っていて、焚木たきぎになりそうな物があると拾って来る。木こ端は、板切いれ、枯枝、米俵むしろや蓆むしろなどまで拾って来た。中には普請場からくすねて来たような板や、よその木の枝を折ったと思えるものなどしばしばあった。しかし、現実にその日の焚木に困っているおふみには、叱ることはおろか、こんなことをしてはいけない、と云うことさえできなかつた。

そして島屋のことが起こつたのだ。島屋というのは表通りにある雑貨商で、五郎吉もと

きどき手伝い仕事を頼まれ、幾らかの銭を貰っていた。大掃除とか、家の羽目板のあく洗いなどというたぐいの、年に幾たびと数えるほどしかないことだったが、それでさえ心待ちにする稼ぎの内にはいつていた。島屋は店の奥に隠居所があり、小さいけれども庭を囲って、板塀がまわしてある。その塀の下半分、横に棧になっているところの木が古くなり、釘も腐つてとれたりして、がたがたに緩んでいた。長次はその棧の板を外して持って来た。幅は二寸、長さは（折ったので）五寸から七寸くらい、薪の小束が出来るくらいの量である。——するとその明るる日、島屋から呼びに来られ、また仕事かと思いなから五郎吉がいつてみた。仕事どころではない、店にはおきぬがいて、長次が塀の板を剥がして持つていった、見ていたあたしが証人だ、あの子はまえから手癖が悪い、泥棒根性のある子だ、などとまくしたてた。島屋の主人はやかましいことは云わず、これから気をつけてくれと、注意しただけであった。五郎吉は島屋から戻ると、稼ぎにも出ずぼんやりと坐りこみ、やがて肱枕ひじまくらをして、寝ころんでしまった。

「それが五日まえ、もう六日になりますね」とおふみは眼つきで日を数えた、「その日の晩、子供たちが寝ちやつてから、初めてうちの人がその話をしました」

五郎吉は話しながら泣いた。おふみは絶望した。まえにも近所の子供たちは、長次のこ

とをよく「どろぼう」などとはやしたてた。けれどもこんどのはまったく違う。おきぬという者がみていた「証人」であり、よその塀の板を「剥がして」来たのだ。まえから手癖が悪かったとか、泥棒根性があるなどと、人の前ではつきりと云われたのである。

「その晩と明くる日いっぱい、あたしたちはよく話しあいました、そして相談がきまったので、子供たちに云って聞かせましたが、子供たちもそのほうがいいって、云ってくれました」おふみはうつろな、殆んど無感動な口ぶりで云った、「——でもまちがわらないで下さい、あたしたちはおきぬさんに云われたことを怨^{うら}んで、それで死ぬ気になったんじゃないありません、生きていてもしようがない、生きているだけ苦勞だということがわかったからなんです」

あたしたちは親の代から、息をつく暇もないほどの貧乏ぐらしをして来た。二人ともあきめくらで、子供も人並に育てることはできない。育てるところか、長次にはぬすみを教えて来たようなものだ。親たちからあたしたち夫婦、そしてこのままいけば子供たちまで、同じような苦勞を背負わなければならぬ。もうたくさん、もうこれ以上は本当にたくさんだ、とおふみは弱々しくかぶりを振った。

「子供たちは死んでくれました、うちの人とあたしの二人なら、邪魔をされずにいつどこ

でも死ぬますからね、子供たちが死んでくれて、しんからほつとしました」おふみはそこで、訝いぶかしげに云った、「——こんなこと云つては悪いかもしれませんが、どうしてみんなは放つといてくれなかつたんでしよう、放つといてくれれば親子いっしょに死ねたのに、どうして助けようとなんかしたんでしよう、なぜでしよう先生」

登は辛うじて答えた、「人間なら誰だつて、こうせずにはいられないだろうよ」

おふみは笑つた。笑つたように登は感じた。それは聞き違いいだつたらう、単に呼吸いきが喉ごすを擦つた音かもしれない。だが登には、彼女が笑つたように思えた。

「生きて苦勞するのは見ていられても、死ぬことは放つておけないんでしようか」おふみは枕の上でゆらゆらとかぶりを振つた、「——もしあたしたちが助かつたとして、そのあとはどうなるんでしよう、これまでのような苦勞が、いくらかでも軽くなるんでしようか、そういう望みが少しでもあつたんでしようか」

登は黙つて、頭を垂れた。

この問いに答えられる者があるだろうか、と登は心の中で云つた。これは彼女だけの問いかけてではない、この家族と同じような、切りぬける当てのない貧困に追われ続けて、疲れはてた人間ぜんたいの叫びであろう。これに対して、ごまかしのない答えがあるだろうか

か。かれらに少しでも人間らしい生活をさせる方法があるだろうか。登は爪てのひらが掌こぶしにくいこむほど強く両の拳こぶしを握りしめていた。

「先生、——」暫くしておふみが云った、「あの人たちがなにかしているようですね」
登は頭をあげた。戸外で大きな物音と、女たちの喚きたてる声が、朝の静かな路地いっばいに騒がしく聞えていた。

「あの人たちですよ」とおふみが云った、「きつとおきぬさんになにかしているんですよ、いってとめてあげて下さいな」

登は立とうとしなかった。

「お願いですからとめて下さい」とおふみが熱心にせがんだ、「おきぬさんの罪じやありません、あたしたちが悪かったんですから、どうか先生いってやって下さい」

七

夜はすっかり明けたが、濃い霧がおりていて、二、三間げんさきの見透しもつかなかった。路地の左右では、戸外で煮焚にたきをする者が多く、その火の側には男たちか、老婆の姿しか

見えなかった。赤く霧を暈かしている火の側から、男たちは登に呼びかけ、笑いながら、向うで聞える騒ぎのほうへ肩をしゃくつてみせた。

「かかあ連中のお慰みでさ、へっ」と男の一人は云った、「みんなこういうことになるのを待つてたんですからね、ああいう女はかかあ連中には仇がたきみてえなもんだ、うちやつときなせえ先生、へたにとめようとでもするとひっ搔かれますぜ」

「そうらしいな」登は立停った。

霧でわからないが、おきぬの家のあたりで、家財でも投げだしているらしい、器物の毀れる音がし、女たちが揉みあい喚きあっていた。中でもいちばんよく聞えるのはおけいと、当のおきぬの声であった。

「殴りやがったな、うぬ」というのはおきぬの声である、「人の頭へ手を当てやがったな、こいつら、きつ」

「これが人間の頭か、これが」というのはおけいの声で、「てめえにあるのは腰だけだろう、この腰で男をちよろまかしやあがつて、この口で人を殺しやあがつた、この淫乱の人殺しあま、こうしてくれるぞ」

「なにが人殺しだ、いつ」とおきぬがどなり返す、殴りあう音といっしょだが、張りのあ

るいさましい声だ、「泥棒だから泥棒だつて云つたんだ、それがなんで人殺しだ」

「長が泥棒ならうぬは男ぬすつとの男強盗のはつつけあまだ、こう、こう、こう」殴る音と同時におけいが叫ぶ、「出ていけ、てめえなんぞにいられちやあ長屋ぜんたいの恥つさらしだ、うせろ、出てうせろ」

「出ていけこのあま」他の女房の声が聞えた、「うちの宿六にまでいろ眼なんぞ使やあがつて、こんちくしよう、かつちやぶいてくれる」

「きつ、やりやあがつたな」

「かつちやぶいてくれる、このいろきちげえめ、死んじまえ」

登は踵きびすを返して差配の家へいった。

半月のち、五郎吉夫婦は長屋を去つた。四人の子の遺骨を持って、どこへいくとも云わず、世話になつた礼廻りをすると、夫婦でより添うようにしてたち去つたということだ。

養生所の印をついた届書と、差配や長屋の人たちの口書くちがきとで幸い町方のほうは咎とがめなしに済んだが、それには一つの代償を払わなければならなかつた。——というのは。

或る日、「伊豆さま裏」を通りかかつて、ふと十兵衛をみまう気になり、差配の家に寄ると、「卯兵衛は内職のことで、十兵衛のところへいった」という。それで路地へはいつ

ていくと、向うから来た女が声をかけた。見るとおきぬなので驚いたが、例のとおり厚化粧をし、小さな赤毛の鬘から、安油の匂いをぶんぶんさせながら、彼女は満面に媚を湛えて頬笑みかけた。

「あら先生、お久しぶり」とおきぬは嬌かしく云った、「よく御精が出ますことね、あたしもこのところ、また頭痛が続いて困ってるんですの、いちどせひうちへ来て——」

登は聞きながして歩きでしたが、毒のある毛虫にでも触ったように、軀じゆうがちくちくするほどのいやらしさと、嫌悪感におそわれた。十兵衛の家へいくと卯兵衛がいたので、いまおきぬに会ったことを告げ、「まだ此処ここにいたのか」と訊いた。

「あいつには手をあげました」卯兵衛はうんざりしたように云った、「長屋を追い出すのなら、五郎吉一家の心中、子供四人の死んだことを町方へ訴えて出るってんでね、——あいつのことだからやりかねませんや、そんなことになれば長屋じゆうの迷惑ですからね、みんなにも因果を含めて、とうとうそのままということになったんです、いやもう、まったくたいした女があつたもんでさ」

登は胸がむかつて来た。その胸のむかつきから、のがれるように、十兵衛のようすを診よう、と彼は云った。

おみきは立つて茶の支度にかかり、十兵衛はいつものところに坐つたまま、じつと鴨居を見あげていた。初めのころより肥えたらしく、肩などまるまるとしていたし、頬などもずつと肉づいていた。登は側へいつて坐り、ぐあいはどうだ、と云いかけたが、すぐ十兵衛に「しつ」と制止された。十兵衛は鴨居のほうへそーつと耳を傾けた。そうして、静かにそつちを指さしながら、登に向かつて頷いた。

「聞いてごらんさい、いい声でしょう」と十兵衛はたのしそうに云つた、「この鶯は千両積んだつて売れやしません、なんていい鳴き声でしょうかね、あの囀り、——心がしんからすうつとするじゃありませんか」

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第十一巻 赤ひげ診療譚・五瓣の椿」新潮社

1981（昭和56）年10月25日発行

初出：「オール読物」

1958（昭和33）年10月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：北川松生

2018年10月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤ひげ診療譚

鶯ばか

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 山本周五郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>